

根室・釧路地域の重磁力異常から推定される中規模地帯区分の地質学的な実態解明の研究 - その1 -

Mesoscale crustal structure based on magnetic and gravity anomalies in the eastern Hokkaido, Japan. –part 1

森尻 理恵 [1]; 中川 充 [2]

Rie Morijiri[1]; Mitsuru Nakagawa[2]

[1] 産総研; [2] 産総研・地調・北海道

[1] GSJ,AIST; [2] Hokkaido Branch, GSJ, AIST

北海道東部太平洋沿岸には極めて特徴的に正の重力異常 (e.g., 森尻ほか,2000) と正の磁気異常 (e.g., 中塚ほか,2005; Sugisaki et al.,2001) が認められる。この高重力異常帯と後期白亜系～古第三系根室層群の分布が重なることから、一般には根室層群の存在が高重力異常の原因と考えられてきた (e.g., 山本・石川,2004)。しかし現在地表に現れている堆積岩主体の根室層群だけで高重力異常を説明することは困難である (森尻ほか,2000)。一方、空中磁気異常は、東経 144 度 30 分付近より東側のデータが欠落している。そこで、Sugisaki et al. (2001) は地上磁気探査を行い、太平洋岸に沿って正、その北側に対を成すように負の強い磁気異常を得た。西田ほか (2002) では、MT 法の結果と合わせて高磁気異常の原因は玄武岩類であろうと推察した。筆者らはこれらの研究を踏まえ、新たに根室層群中に小規模ながら噴出相として産出するアルカリかんらん石粗粒玄武岩に着目して、地質試料の採取を行い、密度測定ならびに自然残留磁化強度、帯磁率の測定を行ったので報告する。将来的には、岩石磁気の検討を進め、磁化を担っている強磁性鉱物についての情報を得ると同時に薄片鑑定や化学分析も実施し、多方面から強磁性鉱物の同定を行う予定である。